

2021 年国際ジェンダー学会研究活動奨励賞の授賞者が決定しました。

国際ジェンダー学会では、専任ないし正規雇用契約をもたず、研究財源の確保に困難をかかえている若手会員の研究活動を支援することを目的に、「国際ジェンダー学会研究活動奨励賞」を2020年度に創設しました。2021 年度国際ジェンダー学会研究活動奨励賞は、3 名の方から応募があり、選考委員会で検討した結果、この 3 名全員に授賞することが決まりましたのでご報告します。

大野恵理 神奈川大学非常勤講師

研究テーマ：移住女性の再生産労働と「住民」としての承認—妊娠・出産に着目して

研究内容：日本への国際結婚移住女性は、妊娠・出産という再生産役割を果たすことで、「日本人の配偶者等」としてや「定住者」として在留資格を得られ、「住民」と承認されている。その一方で、技能実習生が妊娠した場合に、中絶を求められたり、帰国を求められる状況があり、「国民」の再生産ではない出産として排除されている。日本の制度・政策が、いかに移住女性間に階層分化をもたらしながら、誰を「住民」とするかの政策的意図と結びついているかを明らかにする。

小野道子 東京大学大学院総合文化研究科 博士後期課程学生

研究テーマ：女の子の安全保障に関する考察：パキスタンの「ベンガリー」ディアスポラの娘と母にとっての「路上」

研究内容：パキスタンのカラーチー市の路上で物売りや物乞いを行う「ベンガリー」（バングラデシュ出身のベンガル人およびミャンマー・アラカン地方出身のバルミー／ロヒンギヤ）の女の子たちとそれに同行してくる母が「路上」に出てくる理由を人間の安全保障の視点から考察する。

陳予茜(チンヨセン) 明治大学大学院情報コミュニケーション研究科 博士後期課程学生

研究テーマ：中国における一人っ子女性の親子関係に関する研究

研究内容：中国では一人っ子政策によって、一人っ子娘の家庭が出現し、伝統的な男児選好、息子中心という意識と慣習の変化、家父長制の変容が指摘された。しかし、一人っ子娘は、私的領域では、親から投資とサポートを受け、地位と価値が向上したが、公的領域では、ジェンダー不平等、女性差別が存在する。このような状況で、親は娘の教育、就職、結婚、子育てにどのような期待をもち、いかに関わってきたのか。娘は親の期待をいかに捉え、評価するのか。親子はどのような家族戦略をとり、どのような親子関係が形成されたのかを明らかにする。

なお、国際ジェンダー学会研究活動奨励賞の募集は毎年実施します。詳細は <http://isgsjapan.org/> に掲載されていますのでご覧ください。

研究担当理事 柘植あづみ